

第二期 第三十六号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.07.20 定有堂書店 発行

定有堂のレイヤー

奈良 敏行

乃東枯／うさぎのはなし

吉田 恭大

十年目のおじさん

ワクサカソウハイ

四谷で「ボサノバ」にはまる

萩原 俊郎

地球はサッカーボール

吉田 海将

『九州演劇大人女子の主張！』

五島 朋子

ここ本屋さんできた

鳥居 貴彦

ホーチミン報告 ①

芝野 浩貴

バスに乗って

ムラカミヒロミ

坪井日記 ⑩

齊藤 仁昭

白タク体験

山本千津子

鳥取あれこれ その三十五

内田 克彦

カフカとマラー

秦卓 梅林

憐れむ理由

古賀 啓三

フォークダンスの思い出

ドラマリア

…… 編集後記

## 定有堂のレイヤー

奈良 敏行

(定有堂 店主)

ブックキッシュというの、世の中を書物でしか体験できない輩のことだが、定有堂もそのように、すべてが書物頼りで物事が進んでいる。

最近レイヤーという言葉をよく用いる。ちようどオーブンサンドのようなイメージだ。しかし、一番下の層のパンは固い。固いから上の具材の階層を下支えできる。結果各階層はこの底部に世界観を決定されている。

その固いパンの話だ。オーブンサンドの名称は、定有堂では「本のビオトープ」にあたる。『キュレーションの時代』という本のなかでビオトープという言葉に出合った。読み書きのリテラシーという生態系が維持されるためのちいさな圏域だ。この圏域に定有堂の本の世界がある。

ずいぶん遅れて気がついたのだが同じ著者に『レイヤー

化する世界』もある。ビオトープがレイヤーになっていると重ね読みする。しかしすでにここでは固いパン(場)は、読み書きリテラシーではなく、テクノロジへへと変貌していた。

そこでは孤立していたビオトープが、テクノロジという固いパンに支えられる故に接続されてしまう。しかも「私たちは(テクノロジの文字を)読むことができない」。リテラシーが一つの大海となったとき、それをメディアと総称する。これは『大人のためのメディア論講義』の予言するところだ。主張の核心は、メディアは私たちの無意識なのだ、と敷衍する。

これらが定有堂レイヤーの固いパン(場)だが、各レイヤーを見ていくと『人はなぜ物語を求めめるのか』が方向を示すものとして存在する。これはストーリーは意味をめざすという話だ。「わかる」と思う気持ちは、感情以外のなものでもないという。時間順に叙述されるストーリー(物語内容)を、自分の身の丈の因果関係に落とし込むことが、読者にとっては大切だということだろうか。ここに出来事の両義性を手がかりにして読みを変貌させる、ナラティブというキーワードが方法論として立ちあがる。

豊かにナラティブの展開をみせる物語としては、ケン・リュウの『紙の動物園』と『もののあわれ』が短編集ゆ

えに多様なシーンを示してくれる。それとぜひ付け加えたいのが『あなたの人生の物語』だ。異星人の言語の図像性が線状展開の地球言語に衝撃を与える話に驚く。「人間の」という認識の限界を越境させるのが共通の企てだ。

ブッキッシュな読書の眼目は、「知」ではなく「未知」に出合うことではないか。「未知」は人間的知見を拡張してくれるからだ。もし人間に壁があるとしたら「知ってるゆえに知りえない」という境界性だろう。視座の階層をあげることによってこの壁は俯瞰できる。『マルチバース宇宙論』はそんなときに現れた。「世界」が全体を包括できるのでなく地域的なくくりへと格下げされる物語だ。そう視座を見定めれば「知りえないゆえに少し知る」という場所に踏み分けていかないだろうか。

認識は天空を舞うことになる。ブッキッシュだから…。青空ということばは好きでこれもよく用いる。青空はどのようにして立ち現れるのだろうか。引き算して残るものが青空だ。だから「青空」とは肯定することのコトバ的表れだ。そして身の丈が残る。

身の丈もレイヤーのひとつだ。『植物はなぜ動かないのか』という本がある。本当の強さとはなにか、と問いかける。「ある程度擾乱がある不安定な条件では、必ずしも強いものが勝つとは限らない」というのが教えだ。

逆境の擾乱を身の丈に縮んでやりすこす選択だ。レジリ

エンスというのだろうか。

この定有堂レイヤーの扉として『スモールハウス』という本を一步前に押し出している。キーワードは「オフグリッド」。ここでは独立系と言っておこう。ちなみに定有堂ビオトープのつながり合いは「学び系」。結論をつくりこまないということも付け加わる。

2019. 06. 26

- 佐々木俊尚『キュレーションの時代』ちくま新書 2011  
佐々木俊尚『レイヤー化する世界』NHK新書 2013  
石田英敬『大人のためのメディア論講義』ちくま新書 2016  
ケン・リュウ『紙の動物園』ハヤカワ文庫 2017  
ケン・リュウ『もののははれ』ハヤカワ文庫 2017  
テッド・チャン『あなたの人生の物語』ハヤカワ文庫 2003  
野村泰紀『マルチバース宇宙論入門』星海社新書 2017  
稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』ちくまプリマー新書 2016  
高村友也『スモールハウス』ちくま文庫 2018

## 乃東枯／うさぎのはなし

— 六月某日、鳥取、晴れ。

吉田 恭大 (歌人)

砂浜に波が来るのを待っていた人の座っていた椅子のあり

石像のうさぎを並べながら聞く、たすけてもらったうさぎのはなし

国道を逸れて港にゆく道の後からついてくる集配車

岸壁にわらう魚の絵を描いて海辺の小学校の卒業

地に足のついたわたしの足もとにやがて雨蛙がやってくる

# 十年目のおごちゃん

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

先日、定有堂のご主人である奈良さんとメールでやり取りをしている中で、「最近、仕事が上向きになってきましたね」との言葉をいただいた。実際、昨年よりも目に見えて仕事量は増加しているのだが、「上向いてきた」というよりも、「より節操がなくなってきた」というニュアンスのほうが正しい。

私が現在抱えている仕事を、忘備録代わりにちよっと列挙してみたい。

まず、「建設の匠」というWEBメディアでやっている『たてものはいきものだとおもうもの』という連載。これは建築物についての手触りをテーマとしたエッセイだ。それから「HAGAZINE」というサイトでやっている『エクソダス・フロム・イシヨクジュー』という生活誌連載。

魚突きをしたり雑草を食べたり野宿をしたりして、衣食住の過剰性を疑う内容のルポで、いま一番力を入れてい

るプロジェクトでもある。来年中には一冊にまとめる予定だ。あと連載でいえば、「ヘルスグラフィック・マガジン」という医療系フリーペーパーで人体に関するエッセイも不定期掲載している。そのほか、いくつかの媒体でルポやコラムの新連載が控えていて準備に追われている。

そして、夏までに『変な鳥ヤバイ鳥』という二年前に刊行したムックが書籍化するので、その改編作業も慌しくなってきた最中だ。加えて、「t.me」で「テクノラジオコント」を書いている。毎週金曜日の夜に放送しているので、チェックいただければ幸いだ。

ライブ方面の仕事というと、男性ブランコというコンビ芸人、およびナツノカモというスタンダップコメディアン、それぞれのライブ制作を担当している。夏はナツノカモのライブを京都の恵文社で、その翌週には東京の美術館で男性ブランコのコントライブを開催する。

自分が主催している「渋谷いきもの会議」なるイベントも控えているし、月に二回、吉本興業の養成所での授業も受け持っている。鳥取では鳥取市が主催のYouTube番組「今夜くらいトットリの話を聞いてくれないか」の司会と構成が月に一度。あと、よくわからないけれども、某女優のダンス番組も企画進行中である。

これだけでもお腹いっぱいなのだが、さらに寄稿や書

下ろし、単発ライブやワークショップ講師などの仕事がレギュラーの仕事と並行して走っている。なかなか手塚治虫感のある令和元年となっております。

こうやって初めて我が仕事を書き出してみると、自分の「正体不明感」にうろたえる。仕事がたくさんあることはありがたいが、いったいこの男はなにを核に物を書き、喋っているのか。不安になること、山の如しである。

つい最近まで、「からっぽの核」を自称していた。何者でもないことを武器にしながら、節操なく働くことを売りにしていたのだ。でも、文筆稼業十年目の今年、自分の核がようやくおぼろげながら具現化してきた。それはつまるところ、「世界を編む」ということだった。

まだこの世に編まれていない世界を自分で編み、それを通過して、どう自分が変容していくのかを確認したい。それが現在の私の核だ。ひとまずこれからの十年は、それを根拠に書き続けたいと思う。十年後、四十五歳になった私は、いったいどんな核を持っているだろうか。自分の編む世界に、これから何人のお客さんが巻き込まれてくれるのだろうか。未来は想像もつかず、ただ目の前の原稿のマス目を埋める毎日だ。

核とは「芯」ではなく、「皮」に近いもののような気がしている。玉ねぎと同じで、どんな人だってむいてしまえば「からっぽ」だ。ただ、皮のようにレイヤーを

重ねることはできる。レイヤーが複雑に重なった玉ねぎに、核らしきアイデンティティーは宿るのだということ、最近ようやく理解できるようになってきた。年を重ねるということは、そう悪いものでもないらしい。

結局、文筆稼業十年目にして「自分のことを理解しなくてもいい」というフェーズから、「少し自分のことを理解したい」というフェーズに移った、ということなのだろう。ただ、自分のことは自分ではなかなか理解できない。他人の問題は、いつでも明解にして指摘できるのに。そこで私は先日、食事を共にしたパメラという名の日本人とモルドバ人のハーフである学生に、「俺を一言でいうと、どんな人？」と尋ねてみた。するとパメラはうーんと唸ったのちに、「……生き物おじさん？」とつぶやいた。

しまった、最近、自然科学系のことばかり書きすぎていた。精進しようと思った。

※新刊『動物たちの青春白書』、発売中です。

編集部注…『動物たちの青春白書』は二〇一九年六月  
榎出版社刊行。本体一三〇〇円です。

## 四谷で「ボサノバ」はあんな

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

地下鉄でほんのひと駅先の四谷に、ボサノバの女王、小野リサさんの実家のブラジル料理店「サッシペレレ」があることを知った。夜はボサノバとサンバのライブを日替わりでやっているという。これは行かねばなるまい。で、なぜ私がボサノバなのか。

単身赴任の夜は長い、日曜日もひたすら長い。着任当初こそあちこち東京の物見遊山に出かけたものの、そのうち行かなくなつた。独りじやつまらないのである。このままでは「休日はテレビを観ながら昼下がりのビール」という日本の正しい単身赴任オヤジになってしまう。そんな折、かみさんのアドバイスを思い出した。

昔から「音楽と言えばビートルズ」だった私は、東京に転勤直前、和菓子屋のだんなと念願のバンド「ローガングズ」(まあ名前の由来は「想像にお任せする)を結成

した。倉吉市内のライブでビートルズの「恋に落ちたら」とピーター&ゴードンの「愛なき世界」で華麗なるデビューを飾った(と本人は思っている)が、転勤であつけなく活動休止。失意の私に、かみさんが「下宿で独りなら、ボサノバのギターでも練習したら? 音もそんなに大きくないし」と声をかけてくれたのだった。

彼女はジャズ・ピアノをやっているからボサノバもできる。「時々夫婦で共演か、それもいいなあ」。弾けもしないうちから空想する、おめでたい夫。

◇ ◇ ◇  
四谷の「サッシペレレ」は平日の夜とあつて閑散としていたが、豆を煮込んだブラジル料理「フェイジョアーダ」を楽しみながら聴いたボサノバは素晴らしかった。なかでもOLらしきお客さんが飛び入りで歌つたボサノバの上手さに感動(同様のことは昔、神戸のウエスタン・パブでも体験したが、なんで日本人は海外の音楽をあつという間に吸収して楽しめるんだろう:あ、ビートルズも同じか)。

ところが実はボサノバ、ブラジル本国ではさっぱり人気がないと知つて二度驚いた。

場所は移つて、新橋の魔窟のようなバー。そのママはブラジル生活が長かったというので「かの地のボサノバの人気は?」と聞いてみた。すると「うーん、街では

とんど聴いたことがないわね」と意外な答え。なんでも「あれは教養あるアッパーかミドルクラスの中高年に好まれていた懐メロみたいなもの」で、「庶民や若者はほとんど関心がない」とか。N o s s a ! (びっくり！)

前回チリの音楽と軍事クーデターの話を書いたが、根掘り葉掘り調べてみたら、どうやらボサノバも同じような事情があるようだった。

1950年代後半、作曲家のアントニオ・カルロス・ジヨビン、ギタリストのジョアン・ジルベルト、外交官だったモライスといった都市に住む白人の比較的豊かな中間層の学生や若者たちからボサノバは生まれた。心地よく洗練された歌詞は知的で、時に体制風刺も込められ、60年代にはジャズとも共演して(フランク・シナトラやズート・シムズ)人気は欧米や日本にも広がった。

ところが64年、軍事クーデターが起きる。ボサノバを愛した進歩的な知識人階層は抑圧され、衰退していく。有名なセルジオ・メンデスもこのクーデターで米国への「亡命的移住」を決意、ブラジルを代表する名曲「マシユケナダ」は皮肉にもブラジル国外で生まれた。

◇ ◇ ◇  
本国ブラジルでの衰退とは裏腹に、ボサノバは世界で愛される音楽になった。特に日本。ブラジル生まれの小野リサさんらの活躍もあって(彼女はブラジル国家最高

勲章を授与されている)、今やツアーをやるなら日本、昔のレコード音源を探すなら日本、というブラジル本国をしのぐ「ボサノバ愛好国」になっているようだ。

軍事クーデターのせいで、ボサノバは60年代で「時が止まった」音楽でもある。演奏されるのは今もジヨビンやジルベルトらの曲が大半。「イパネバの娘」「おいしい水」「デサフィナード」など、数えると二十数曲。ギター・コードはジャズと同じで超難解なのが、「一月一曲ペースでマスターすれば、二年でボサノバが完全制覇できるではないか！」大それた野望を抱いて銀座の山野楽器で「ふりがな入りポルトガル語で歌うボサノバ名曲集」全三巻を買い、しばし猛練習に励んだ。

だがギターのコードはともかく、ポルトガル語の歌詞がどうにも覚えられない。例えば「イパネバの娘」。「オーリヤキ コイザ マイズ リンダ：」まったく意味の分からないカタカナの呪文を丸覚えしなければならぬ。根を上げて、くだんの新橋のママに「ポルトガル語はどうやってマスターしたの？」と尋ねてみた。

すると「ポルトガル語？ 難しいので私、ずっと英語で通していたのよ。ごめんね。まあ、頑張っつて」。Oh Me u D e u s ! (オーマイゴッド！)

# 地球はサッカーボール

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

J1FC東京で先月までプレーした18歳、久保健英選手が、スペイン・レアルマドリードへ移籍する。東京に転勤した5月以降、ビッグクラブへの移籍が近いと見込んだ私は、これまで3試合を見に行った。

初めて見たのは、仙台戦があった秩父宮ラグビー場。

後半からの出場だったが、相手の頭上を浮き球で越して抜きさるなどして会場をわかせた。この若さで会場の視線をこれだけ集める選手は、国内で唯一無二だろう。大分戦では、あのオランダの名選手の名を冠したクライフターンが圧巻だった。相手DFはトップスピードでの体重移動について行けず、グラウンドに崩れ落ちた。サッカーに必要なのは技術だ、と言わんばかりのプレーを見せ続ける久保選手。リーガエスパニョーラへの挑戦でさらな

る飛躍の行方を見守りたい。



「見る」ことが現在の主な楽しみ方だが、小学校3年にボールを蹴り始めて以降、年を重ねることにいろんな楽しみ方があった。今でも子どもの頃に決めたシュートの場面は夢に出てくるし、高校時代に韓国に遠征に行った思い出もある。

でもやって一番良かった、と思ったのは大学の交換留学で、スウェーデンで1年過ごしたときだ。学生が所属するクラブの一つでプレーしたが、驚いたのは練習で男女が一緒にプレーすること。さすがにガチのフィジカルコンタクトは避けるが、190㎝近い大男に金髪をなびかせて挑む姿にワクワクした。私もいつものように混ぜてもらったある日、足元のボールを奪おうと突っ込んできた女性の両足の間にスキが。その間をさりと通す「また抜き」をすると、「フアーツク」と思い切り怒鳴られてしまったこともある。

サッカーを楽しみながらも、学生なんだから当たり前だが、まず学問を優先する姿勢からも学ぶものがあった。大学の講義やその他の生活もそこそこ充実していたが、言葉を交わす以上に、一緒にボールを追えば仲良くなれた。



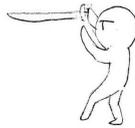
結婚して就職し、長男、次男が小学生になって所属したチームでは、週末だけの「お父さんコーチ」に。たまにグラウンドに現れては、ずっと怒鳴っていた。

5年前、2人とメッシを見にFCバルセロナのキャンプノスタジアムまで行ったことがある。観客席には、「クラブ以上のクラブ」という巨大な文字が。様々な制約があった独裁政権時でもここに来れば、カタルーニャ語を自由に話せ、歌を歌って応援できたという。ファンにとつてのスタジアムの意味を改めて考えさせられた。

当時40歳だった私は街中のストリートサッカーにも飛び入りで参加。2年前に次男とバルセロナを再訪した時は、つてをたどつて彼を郊外のの街クラブの練習に参加させた。ロツカールームに放り込んだ時は啞然としたが、本場のサッカー少年たちは温かく迎えてくれた。

その後、高1になった長男は、中2の時に京都府の選抜チームに入ってデンマークに遠征。中2の次男は来春、所属チームでスペインに遠征する予定だ。今後もしばらくは、ボールを追つて地球を移動するかもしれない。

サッカーには「読む」楽しみもある。次回書く機会があれば、書評に挑戦したい。



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階

# 『九州演劇大人女子の主張!』

三股町立文化会館演劇祭・スピンオフ企画

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属

芸術文化センター)

全国的に活動する劇団「こふく劇場」の演出家・劇作家永山智行さんが、様々な演劇事業に携わっている。「まちドラ!」もその一つ。文化会館の「戯曲講座」で永山さんの指導を受けて、半年かけて町民たちが書き上げた戯曲作品六本を、町内三カ所の会場で次々と上演する演劇祭だ。音響や照明、小道具などは使うが、台本を持つたまま上演する、リーディング公演というスタイルだ。六本のうち三作品は、九州を拠点に活躍する劇団の演出家が三人、三股町に一週間滞在して、応募してきた町民と舞台を作る。残る三作品を九州各地の劇団が上演する。これらの演出家や劇団の選定、町民のキャスティングは、演劇祭ディレクター永山さんの担当だ。

六月は珍しく観劇予定がないので、今回は五月の観劇体験から書く。ここ数年、五月最後の土日は、宮崎県三股町に出かけるのが恒例となっている。鳥取からだ、智頭急行で岡山に出て、九州新幹線で終着の鹿児島中央へ行き、JR日豊本線特急きりしまに乗り換えて都城駅まで、約7時間半の道のり。三都城駅から普通列車で一駅、十分で三股駅に到着する。

宮崎県南部にある人口約二万五千人の三股町を、九州の演劇関係者は「演劇の町」と呼ぶ。三股町立文化会館が、毎年五月に開催する演劇祭「まちドラ!」の蓄積が演劇の町を育ててきた。文化会館では、都城市を拠点に

リーディング公演は、一作品三〇分と短い。十二時から六時まで、三会場を移動しながら、笑いと涙の短編六本の公演を堪能できる。ツアーガイドに扮した劇団の俳優が、会場から会場へと観客を誘導し、幕間には、特設野外カフェで軽食をとったり、音楽ライブも楽しめる。町民が戯曲を書き、上演にも参加し、複数会場を使うことで町の賑わいも作り出す、という重層的な仕掛けとなっている。三股町民のほか、お隣の都城市や鹿児島県から駆けつける観客の暖かい拍手と笑い声も心地よく、本格的な演劇や芸術作品が上演されるわけではないが、ついつい「また来たよ」と足を運びたくなる演劇祭である。

今年も、参加劇団が参集する大宴会にも参加させていただいた。町民のリーディング公演を指導した演出家、上演劇団、また各会場の上演を支えた舞台技術スタッフ、運営全般に携わる地元のコブク劇場メンバーなど、「まちドラ！」を担った演劇関係者の交流会として、毎年、初日土曜日の夜に開催されているとのこと。演劇祭に携わる関係者のほか、毎年駆けつける在京の演劇ライターや、県内外の公立文化施設演劇事業担当者、関東のアーツカウンシル担当者など、今回は総勢約六十名が、都城駅近くの地鶏料理店大広間に集った。

大宴会の庄巻は、『九州演劇大人女子の主張！』と題された十五分ほどの朗読寸劇だ。脚本は、熊本県の「劇団きらら」を主宰する池田美樹さん。今回は、三股町に来てはいなかったが、九州を代表する劇団として活動歴も長く、これまでに「まちドラ！」でも出演・演出を果たしている。寸劇に登場するのは、参集した宮崎・熊本・福岡・長崎の俳優・演出家たち総勢8名の女性に加えて、演劇ライターも「まちドラ！」常連として出演。アラウンド・サーティと、アラウンド・フォーティという2世代が対抗して、女性が演劇活動を継続する中でぶつかる数々の困難や悩みといった「あるある」を皮肉たつぷりにやり取りする。池田さんは、実際この女優たちに取材して戯曲を書いたそうで、会場は爆笑と拍手の渦に包ま

れた。

参加してみて、この飲み会は、九州演劇界の非常によってきた交流の場となっているのだ、と実感した。「まちドラ！」は表向きには、三股町による町民参加型演劇祭だが、その裏には、九州演劇の相互交流とネットワーク作りを進展させ、演劇関係者の切磋琢磨を促すプラットフォームという役割を担っているのだ。そもそも三股町は、九州各地からもアクセスが容易とは言えない場所だ。一週間滞在する演出家たちは、相互に他の町民参加のリーディング公演の出来栄を気にしている。また滞在期間中、町民との練習時間は平日夜に限られる。そこで、空いた時間の相互交流が、互いをよく知る機会となり、信頼や新たな作品を生み出す契機となっている。そして、九州各地から集う劇団関係者は、町民の戯曲を上演するという共通のミッションを通じて、互いの創造性を競い合う。アクセスしにくい場所が作り出す、ゆったりとした時間が「九州演劇」を確かに育んでいる。

## 「」本屋さんで来た

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

「ここ本屋さんで来た」とおもての通りから女の子のうれしそうな声がする。「そやなあ」と言いながら通り過ぎていく親娘。ああ、入ってきたらいいのに、と思う。絵本もあるよ。マンガもあるよ。おしりたんでも置いてるよ。でも、彼女らにとってここは「本屋さんで来た」ではない。いつか「本屋さん」になるかもしれないし、「知り合いのおじさんの店」になるかもしれない。ならないかもしれない。

この建物には3年前から住んでいる。引っ越してきて一ヶ月後に町内会の役員になっていた。どういいう経緯でそうなったのかは知らない。でもおかげで町内の人たちの顔はだいたい覚えた。ゴミのネットは誰それが出してくれているとか、市民新聞を配ってくれているのは○○さんだとか。隣の大きなマンションは町内会に入っていない。

い。顔のわかる人もいた。わからない人の方が多かった。すれ違っても目があうことは少なかった。そもそも、朝から仕事にいつて夜帰ってくるだけの生活では人とすれ違うことがなかった。

子どもができて、近所の人たちとの付き合い方がかわった。といつても「いやー、おおきくなったねえ」とか「かわいねえ」とかいつてももらうだけなのだけだ。子どもがいなくても「今日はどうしてはるの?」とか「もう保育園なんやねえ」とか、挨拶以外のなにかしらの会話が発生する。共通の話題。

本屋を開いてから、その関係がさらに広がった。となりの家の人が商工会のあつまりに誘ってくれる。前の町内会長が無料配布しているタウンガイドを持ってきてくれる。向かいのおじいちゃんは瀬戸大橋の設計をした物理学者だったことを知る。あの人、そんな仕事してたんだよ。マンションに住む姉妹が「これあげる」と大きなおもちゃを持ってきてくれたこともあった。お札にピーナツをふた袋あげる。向こうの通りのてっちゃんが三輪車をくれる。オレンジ色の家族親戚で20年のりまわしたかっこいいやつ。お札にピーナツをあげる。マンションの清掃の方がうちの前まで掃いておいてくれる。お札にピーナツを…。

店を介して暮らしが深まっていく。「近所」の範囲が広がっていく。となりの町内も近所。向こうの通りも近所。自転車で5分くらいならまあ近所。住んでいるだけでは見えなかった景色。

毎週のように顔を出してくれる「近所」の人も現れた。突然「沖縄のな、石鹸つてしらない？ 30年位前に土産でもろたんが忘れられへんのよ」とかいう。おかげでいまでは店の一部が石鹸屋になった。こちらも負けじと「倉庫をさがしてるんですよねえ古本の」とかいってみる。「ああそしたらまいこちゃんにきいてみよか！」との返事。あんまり期待してないなかったが翌週には物件を3つもつてやってきた。「ここはな、まいこちゃんの友達の前にすんでたとこ、ほんでここは、倉庫に使ったはったんやけど最近おじいさん亡くならはったんやって。大家さんはトミーつてよばれてるねん。貸してくれるかはわからへん。で、こっちは修理せなあかん雨漏りするし」とか言ってる。全部歩いて行ける範囲。住んでるだけでは絶対に出会わなかった人。

豊かやなあ。

それでも「ここ本屋さんできた」でしかない人たちも

いる。重なることのない暮らしもある。どうにかしたら開かれるのかもしれない。推理小説を置いてみるとか、もつと早朝からあけてみるとか。関わらなくてもいいのかもしれない。本は読まないんですとか、ネットでしか買わないんですとか。そういう人もいる。それでいい。でももしかしたら、いつか急に開かわることになるのかも。しれない。そのときにはしつかり受け止めたいなと思う。風を待つヨットののように帆を広げておくこと。

小学生くらいの男の子がおそるおそる入ってきた。「クルマの本つてどこに置いてるんですか」ときく。「いまは絵本くらいしかないなあ。もつと詳しいのがいいやんな？」「そうですか？」うつむく子ども。「どんなん探してる？どんなん読んでるの？」聞いてみるがうつむいた子の耳にはもうなにも入っていかなかった。男の子の勇気がしぼんでいくのがみえた。ああ、ごめんなあ。つぎ来た時はちゃんとしくしな。またきて。

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 オープン

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

# ホーチミン報告 ① 芸術家と科学者と戦争

芝野 浩貴

(地球探検家)

るが、アンドリュー・ワイルズが証明したフェルマーの定理の下支えとなった「谷山・志村予想」の美しさとはまた違った批判精神を合わせ持っていた人だった。丸山真男をジャーナリストティックだと揶揄したのもピカソの気持ちと同じだったのか。

ピカソはゲシュタポに言った。「芸術家は悲劇に敏感な政治家であるべきだ。目で見ただけの画家や耳で聞くだけの音楽家はいけない。ゲルニカは私が作ったのではなく、あなたたちが作ったのだ」と。学会会議の隙間時間にマドリードのソフィア王妃芸術センターで本物のゲルニカは観たことがある。それ以来、渋谷で井の頭線に乗るたびに岡本太郎の「明日の神話」と横長8メートルあったピカソの絵と比べることになった。

数学者の志村五郎が5月3日亡くなった(89歳)。令和早々だが、訃報の一報は Princeton に届けられたので日本人が亡くなったというのでは語弊があるかもしれない。30代の時には、樺美智子の死にショックを受け、ソ連のシベリア抑留に怒りを感じていたらしい。(樺美智子の曾祖父の樺正薫は鳥取市生まれの数学者で数学教育の近代化に貢献した。正薫の墓は鳥取市の観音院にある)「記憶の切絵図」や「鳥のように」を読めばわか

グロタンディークをはじめとする数学者列伝で有名な数学歴史の研究家の山下純一は、山崎博昭と高校の同期(1967.10.8羽田事件で死亡)である。「磁力と重力の発見」、「小数と対数の発見」などの数学や物理の本質を突いた本を書き続けた山本義隆は元全共闘代表である。平素は日本で教育研究され基本的には海外には興味はないそうだが、「0.8山崎博昭プロジェクト発起人」として例外的にホーチミンには渡越されている。戦争を芸術で制止できて、数学で縮小・廃止・後始末できるのか？

そんな思いが私をホーチミンに向かわせた。

ホーチミンは人名でもあり、町の名前でもあるが、かつてはサイゴンだった。「ミス・サイゴン」のミュージカルを帝国劇場で観たことがある。亡き本田美奈子が主演だった。等身大のヘリコプターが劇場内に降りてくる。あのヘリコプターは何だったのか？ベトナム戦争終結の場となった統一会堂で振り返った。統一会堂の屋上には1975年4月30日のままのヘリコプターが配置してある。ベトナムの歴史は統一会堂の名前の歴史でもある。フ

ランス領インドシナの際はノロドン宮殿、ベトナム共和国成立時は独立宮殿、サイゴン陥落までは大統領府だった。

ホーチミン滞在時の拠点は、Truong Dinh 通りのホテルであった。チュンディンと読む。ru の綴りでは r を発音しない。黙字があるのはフランス支配下の名残なのか？一方で王朝時代の名残か、固有名詞やベトナム語の表記に使われたチヌムは漢字への抵抗だった。例えば「感謝する」を意味するベトナム語は「カモン」と発音するが、感恩が語源なので視覚的には意味はわかる。使用言語が植民地征服者側の言語になるのはベトナムとて例外でないが、17世紀にカトリックの宣教師によつて広まったクオック・グーというラテン文字表記が今後もいいのかは私にはわからない。(1960年北ベトナムから、1975年南ベトナムからチヌムは消えたが、ベトナム文化維持のためのチヌム復活の声は常にある)

映画では、「ディアハンター」や「タクシードライバー」のロバート・デニロ、「地獄の黙示録」ゴッポラは三島由紀夫の豊饒の海を参考にしたでの虎、「プラトーン」や「7月4日に生まれて」のオリバー・ストーンやトム・クルーズの印象と共に、いずれもリアルタイムで観てアメリカの狂気を感じたものの、ベトナム側からの視点を持つていたとは言い難かった。

統一会堂から徒歩で10分も歩かないうちに、戦争証跡博物館に着く。(この博物館で上記の山本義隆は2017年にベトナム展を開催した)建物の壁には枯葉剤にやられたマングローブの写真が拡大展示してある。日本人写真家の中村悟郎が撮影したものである。ベトナム戦争は再記するまでもなく、軍事費用、戦争期間、死傷者数ともに第2次世界大戦を上回っており、元ベトナムの支配国フランスを始め、世界各国からのベトナム戦争反対運動の写真が館内1Fに展示してあった。ベ平連関係や山崎博昭さんの写真も展示してあった。実際に使われた兵器・枯葉剤の被害の写真・ホルマリン漬けの奇形児・虐殺された死体の写真などなど。広島平和記念資料館や沖繩平和祈念資料館と重ねながら、ベトナムの住民側の視点での展示が目立つ。枯葉剤関係の写真では中村悟郎氏のベトちゃん、ドクちゃんのその後の写真見ながら(ベトちゃんは2007年に亡くなり、ドクちゃんは2009年に双子の父となっている)、エージェント・オレンジに関しては、ジョン・ミッチェルに直接話を伺った経験から沖繩とも個人的にリンクさせていた。

そして、その隣にこの博物館の目玉とも言える写真家の展示が部屋の1/3を占めて展示されていた。ロバート・キャバや沢田教一は戦火の犠牲となりこの世にはいないが、音信不通でも何度か言及した、まだご存命の、沖繩生まれの、あの人であった。

## バスに乗って

ムラカミ ヒロミ

（ライオン・ブックマン）

「自転車にのって」というフオークソングはあったし、  
「汽車に乗って」という詩もあった。

「バスにのって」という童謡もあるらしいが、いささか  
騒々しい歌のようだ。

村上春樹の初期の短篇に、バスに乗って病院に行くお  
話があったっけ。

子供の頃は、バスが鬼門だった。いや、今だって、得  
意ではない。長距離になると駄目である。昔は、二十分  
と乗っていられたかった。だから、修学旅行のようなバ  
ス旅行は、霊験あらたかな酔い止め薬を探すことが肝要  
だった。

以前は、トラベルミンに代表される錠剤くらいしかな  
かったのが、段々に進化して、アンブル剤やカプセル剤  
の抜群に効きの良いのが発売されるようになった。かく  
して、車酔いそのものは回避できるようになったが、や  
はり三方良しの薬というのではないもので、猛烈な眠気を

引き起こすのが難であった。見物先では半睡状態で、宿  
舎に着いた頃に冴えてくるという按配である。

最近の長距離バスは、かなり豪華な仕様のものである  
と漏れ聞くが、どんなに設備が充実し、居住性が向上し  
ても、あの長い車体を四つの車輪で走らせるという仕組  
みそのものが変わらない以上、乗物酔いは永遠になくな  
るまい。

初めて一人でバスに乗ったのは、小学校四年生の時だっ  
たろうか。昭和四〇年代も半ばである。

さすがにボンネットバスは、もう走っていなかったと  
思うが、ワンマンにはなっておらず、必ず車掌が添乗し  
ていた。

乗降口は真ん中一箇所。折戸を車掌が手動で開閉する。  
車掌は基本、女性であった。

帽子を髪に斜に止め、紺の制服を着、腰にバッグを通  
したベルトを締めていた。バッグは、がま口を大振り  
にしたような黒い革製で、中には切符、ハサミ、お金が入  
っていた。（たぶん、他にも入っていただろう）

乗車すると、席に回って来て、行き先を聞き、料金を  
受け取って、切符を渡す。

切符はお札より一回り小さいくらいの薄様紙で、綴り  
になっている。それを切り離して、ハサミを入れる。ハ

サミといっても、かつての駅の改札で見られた「改札鉄」とか「改札パンチ」とか呼ばれるのと同じ、パンチ状の道具で、これで切符の一边の一部分（多分、乗車場所とか降車先とかを示していたと思う）に切り込みを入れるのである。真ん中の部分には、路線図が印刷されていたように記憶する。

車掌は停留所のアナウンス（降りる人間は手を挙げるか、声で意思表示をした）や、踏切や狭隘道路などでの誘導（車を降りて、笛を吹きながら運転手に指示する）、小荷物の預かり（停留所で発送人から荷物だけを受け取り、目的地の停留所で受取人に渡す）などの業務も行っていった。

車内設備に目を向けると、ボンネットバスの頃は、床は板張りで、ワックスが塗られていた。梅雨時などは、その匂いが車内に籠って、それだけで酔いを誘発したものだ。

天井近くには、左右に一列づつ、現在でも鉄道車両に見られるような荷台（網棚）があり、座席の前には必ず灰皿が付いていた。車内喫煙は当たり前の時代であった。本体の前カバー部分が可動式になっており、底の部分を開いて、溜まった吸殻や灰だけを落とすことができた。

運転席の網棚には、赤十字マーク入りの救急箱が載っており、席のすぐ後ろの壁には、紺色の紡錘形をした一輪挿しが付いていた。花が活けてあったかどうかは記憶が定かではないけれど。

そうそう、運転席のサイドウィンドウの外には腕木式の方角指示器が設置されており、曲がる際に、収納された羽根型の腕木が横に飛び出す仕組みだった。（乗用車もそうだったような）

正面と側面の行き先表示は、布製の巻取り式で、手動でハンドルを回して、行き先合わせを行っていた。

停留所では、目的のバスが来たら手を挙げて乗車の意思表示をする。最近では、待合客がいたら、必ず止まるようになったが（京都のバスは、客がいなくても止まっていた。時間合わせのためか、観光地ゆえか）、以前は、通過されてしまうことも少なくなかった。雪の日など、満員通過というのもあったなあ（今でもあるのか知らん）。逆に、客が他所を向いていたたり、乗るのかどうかはつきりしない場合、止まってから、車掌が「お乗りになりますか」と尋ねる場面もあった。

半世紀も前のお話である。

# 坪井日記 ⑱

齊藤仁昭

(長崎書店)

6月某日

サッカー、チャンピオンズリーグの決勝戦を、時に起きて観戦。今までは民放でも放送していたが、ついにDAZN独占配信となってしまったため仕方なく契約した。世界中のスポーツ放送を牛耳る放送局の出現ってなんだか、弓っぽくないですか。リヴァプール対トッテナム。結果は2-0でリヴァプールの優勝。ジェラードが居た頃や Klopp が監督になって以降はリヴァプールを最頂にしている。プレミアリーグでは勝点差1でマンチェスターシティに優勝をさらわれたが、この試合では負ける感じが試合中に全くなかった。面白みに欠ける試合だったという評論をいくつか読んだが、自分はそう思わなかった。シーズンの締めくくりに向けてジリジリと90分間を戦い抜く気迫が見てとれて飽きることがなかった。ジェラードからキャプテンを引継ぎ、苦勞をしてきたであろう

ジョーダン・ヘンダーソンの歓喜の表情が素晴らしかった。

\*

6月某日

配達中に通った服屋に吊るしてあったTシャツに「COSTA」のロゴを発見。バンドのオアシスのロゴをそのままあしらっていた。40歳の自分には、なぜ今? という感覚があるのだけど、そういえば最近の若者のバンドでオアシスのフォロワーみたいなをチラチラ見かけていたのを思い出して納得。僕はファーストアルバムがいちばん好きでした。次がセカンド。サードからはほとんど興味がなくなってしまった。90年代リバイバルってあるんだなー。長生きするもんだなーと思いつながら実家でオアシスのレコードを何枚か掘り出した。

『CIGARETTES&ALCOHOL』の12インチシングルとか結構出回ってたのかな。これのB面にビートルズの『I Am The Walrus』のカバーが収録されていて当時オリジナルと交互に聴きまくっていた。プレス年が1994年とあるが、高校生だったのか。その頃とさほど自意識に変化が感じられない。人格形成は大体中高生の頃で完成してしまうって本当なんだろうな。子育てに活かしたい…

多分珍しいと思われる7インチも出てきて、オアシスのボーカルとギターのギャラガー兄弟の口喧嘩を収録しただけのブート盤。もともと英語の聞き取りは苦手だけど、訛りがすごいのと4文字言葉連発でほとんど何て言ってるかわからない。インタビュ中に兄弟喧嘩もするし、ドラマは首になるし、色々とロッキングオンのエピソードが楽しかった記憶が蘇る。

ファーストを聴き直してみても、2曲目の『Shakermaker』がすごく好きだったのを思い出す。ビートルズの『You can't do that』へのオマージュ(だと思う)。ビートルズ愛を公言して憚らなかつた人たちでもありました。

\*

6月某日

古書店で『うしおととら』全巻を購入。店主が500円おまけしてくれた。数年ぶりに読む。こんなに無理やりな話の展開だったつけと驚きつつもそれも含め少年漫画の傑作のひとつと言える。何回泣いたかわからないくらい泣いた。人間と人間以外のパートナーが主人公の漫画でうしおととら以前のもをご存知の方がいましたら教えてください。

\*

汗をかいたり休んだり  
嘘をついたりつかれたり

する  
髪を切ったり伸ばしたり  
訳もないのはしゃいだり  
するして

窓を開けて 声を聞かせて欲しいの  
ドアを開けて 声を聞かせて欲しいの  
このまま通りを歩いて  
どこかへ行けるまで

ラフなハーモニー鳴らして  
日々をタイトにこなしたり  
する

僕はLightnin. たとえばね  
雲の合間に潜んだり  
するして

窓を開けて 声を聞かせて欲しいの  
ドアを開けて 声を聞かせて欲しいの  
このまま通りを歩いて  
どこかへ行けるまで

(ケバブジョンソン「窓」作詞..杉浦真寛)

# 白タク体験



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

日々の生活に追われて社会に目を向ける余裕はないと言いながら、ちらつと見る新聞やテレビからは、暗く悲しい気持ちになったり不安になったり、怒りが込み上げてきたりするニュースしか入ってこない。どの事件や問題もそれを起こした人のみが問われるものではないけれど、私にできることといったら…… 老後に2000万円いるって？引きこもって生きていくにも年金だけでは生活できないし、何歳まで車の運転ができるだろうか、考え方を変えると云っても……

政府は人手不足の対策として70歳まで働ける社会を目指すという。運転手不足の解消としては、マイカーでタクシーのように有料で人を乗せることができるようになる

りそうだ。「白タク」と言えば、ロシアに住んでいた頃のことを思い出す。1992年に初めてウラジオストクの町を歩いた時、街中で日本語が目に入ってきた。走っている車の車体には屋号や広告の漢字とひらがな、カタカナ。車だけを見ていたら日本にいるのと同じ。留学生だった時の移動手段は徒歩だったが、2年後に働くようになって行動範囲や交際範囲が広がると、公共交通機関と徒歩だけでは予定通りには目的地に行けず、時間にルーズと言われるロシア人との約束にもかなり遅れてしまうことがあった。いつ来るかわからない路面電車やトロリーバス、原因の一つは輸入中古車が急激に増えたために道路は常に渋滞、そして頻繁に起こる自動車事故だった。そのうち中古車から日本の文字が消えていった。

ロシア人にとっては通りで車を止めて相乗りで行くことは普通のように見えた。私の白タク・デビューの日も近づきつつあった。行きたい方向の道路で、停車しやすいつころ、大体は停留所からちよつと離れたあたりに白タクを止めようとしている人が立っているの場所はわかる。右手親指一本を横にして進行方向に向けるか、手の甲を上にも右腕を斜め下に伸ばして「お願い、停まって」と念じながら向かってくる車をじつと見る。実際には「誰か乗せてくれへんかな」とぼーっと立っているほうが停

まってもらえた。運転している人に自分の行き先を告げて、大事なのは料金交渉。学校で習った買い物でよく使うフレーズ「スコリカ ストーイット（おいくらですか）」はダメ。一言、「スコリカ」で決める。私の脳内翻訳では「なんぼ？」この場合、右側通行に日本車の右ハンドルだとドライバーの近くで聞けるのでいい。高い金額だったり、行き先が違っていたらそれまで。長く待っている間に同じ方面の人がいれば相乗りにしていた。もちろん途中でどちらか一人が降りることになる。

金額、すなわち数字がきちんと聞き取れないことには騙される可能性もあるが、運転している人にとっては、自分の目的地までにちよつとしたお小遣い稼ぎ、といったぐらいの感じだったが、それよりも生活上の不便さをみんなが共有しているので、お互いに行けることは助け合って、という気持ちの方が大きかったと思うし、自然だった。時とともに「白タク」の名の通り生活費の一部になっていった。知人の中にはそれで生活している人もいて、私はいつも空港までの送迎をお願いしていた。次にドライバーも中央アジア出身の人が増えて、せっかくロシア語のヒヤリング力があったと思つたら、訛りのロシア語に苦しむことになった。

高齢化問題は私の住んでいるところでも同じ。買い物に行けない高齢者のために買い物代行やお薬をもらいに行く仕事をしているが、歩ける人は私の車に乗ってお店に行きたいし、病院へも乗せて行ってほしいと希望されるが、仕事上はできない。同じ村の人が道路を歩いている時には「どこまで？ 乗って行き」と声かけ一つでスムーズにいく。

一年前にはこんなことがあった。関西空港へ行くのに泉佐野駅で前泊した翌日、朝一で駅に行ったが豪雨の予報で運転は取りやめになっていた。すぐにタクシー乗り場に走り3番目に立っていたが、タクシーは来ない。私の後ろにはすでに20人以上が並んでいた。私の前の二人は順に一人で乗って行ってしまった。「一緒に乗っていないですか」と聞く勇氣はなかった。次に来るのは何分後かわからない。やっと来た。「一緒に乗って行かれませんか」と声を大きくして言った。私の真後ろにいた空港に勤務する女性と、商談に遅れてはならないビジネスマンが列の後ろから同乗した。「あと一人、乗れますよ」しーん。三人で空港に向かった。皆さんそんなに急いでいなかったのだ。

# 鳥取あれこれ

その三十五

内田克彦

(地域研究家)

五(明治二八)年七月以降となる。どうしたわけか鳥取西高同窓会の会員名簿に名前が見当たらない。一八九五年の卒業生だとすると、その中に一八七八(明治一一)年三月二八日生まれ、即ち企救男と同学年の生まれとなる佐々木惣一がいる。二人は親交がなかったのだろうか。企救男は一九一二(明治四五)年小樽新聞に連載した紀行文『拾有七年』に次のように書いている。

僕は此「岩井に住んでいる一筆者注」井崎「精一筆者注」君とは中学の寄宿舎で一緒であった上に又味道館と云ふ漢学の塾でも一緒であった(中略)。

此味道館の先生は今年七十五になる、但馬国宿南池田草庵の第一の門弟で陽明学派の人であった(略)此塾生は従て因幡派と但馬派と二派に別れて随分と愚論を闘はしたものだ(略)因幡派の側には此井崎君の他に浦富の沢田節蔵君も居た、沢田君は今倫敦に行っている、大学生の時に既に外交官の試験に登第して年少外交官中錚々の人物に数へられてる

鳥取市に一八九三(明治二六)年から一九一五(大正四)年まで「味道館」という名の漢学塾があった。主は森梅園周一郎である。森は、一八三八(天保九)年、現在の新温泉町浜坂に生まれ、一八五七(安政五)年から一八六九(明治二)年まで、現在の養父市八鹿町にある但馬聖人池田草庵が開塾した青谿(せいけい)学院に入門し、漢学を修行した。塾生には、北垣国道、原六郎らがあった。森は帰郷後の一八七〇年、浜坂に味道館を開塾した後、一八九三年に鳥取に移ったのである。

一九八七(昭和六二)年に顕彰会から『味道館主梅園森周一郎先生とその門人』が出版されており、六四四名を数える門人帳の中に、なじみの名前が出てくる。

まず、一八七七(明治一〇)年四月二七日生まれの碧川企救男が明治二七年旧一月一三日に入門している。であれば、鳥取県尋常中学校の卒業は少なくとも一八九

企救男は七歳年下の節蔵を知っていたのであろう。因みに、ここに名前の挙がる井崎は企救男より少し前の、明治二七年旧九月一二日に入門、中学校を一八九八(明治三一)年三月に卒業している。

一八八四（明治一七）年九月九日生まれの澤田節蔵は、企救男より早く一〇歳になる前の明治二七年旧二月二四日に入門している。

節蔵は一九六二年に発刊された『鳥取教会七十年史』に次の文を寄稿している。

その頃浦富には上級学校がなかったのでその春鳥取の高等小学校に入学した。（略）到底浦富より毎日鳥取に通学出来ず幸い鳥取にはそれ以前より祖父の末弟が子弟育成のため味道館と称する漢学の私塾を開いておられたのでそこに預けられ夏冬の休みのとき以外はそこから高等小学校に通っていた。

当時の味道館は、国道から営林署の角を折れて御堀に向かつて少し行ったところにあった。また、国道を挟んで営林署の向かい側には西洋館があつて、組合教会の宣教師のバートレット夫妻とミスデントン女史が住んでおり、節蔵は二つ年上の従兄の森孝治と「ぶっつけに」尋ねて行き、初めて聖書に接することになった。しかしながら、鳥取教会では受洗せず、水戸中学に転校した後そこでフレンド教会（クリスト新教クエーカー派）の会員となるのである。

一八八八（明治二二）年一〇月一七日生まれの澤田廉三は、明治三四年旧二月一九日に入門している。

廉三は『随感随筆』の中に収録された「父子三代の親日米人」に次のように書いている。

私は明治三十四年、齡十二にして生れ故郷を後にし、鳥取中学校に入学、初めて親許を離れて下宿生活を味わったのである。

そのとき私の父は

「これからの日本人は（略）廣い外國に出て働くことを心がけねばならない。それには外國語修得が必要だ。幸いに自分の鳥取県会議員時代に知合いになったバートレットというアメリカ人宣教師がいるから、そこに行つて英語を習らえ」といつて、名刺に片仮名で書いた紹介状をくれた。

廉三が味道館について書いた文章は未見である。廉三は『鳥取教会百年史』によれば、一九〇四（明治三七）年三月一三日に受洗している。

# カフカとマラー

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

カフカ伝説と云つたものが在る。つまり世の名声を厭はず常に謙虚な聖人として死期を悟り友人プロットに作品一切の焼却を依頼した其れ。しかし詳しく生涯を辿つてゆくと別の肖像も浮かんで来る。一見、謙虚な人物と付かず離れず、「いずれ自分の時代が来る」とうそぶき、固く心に期してゐた物書き、いはゞ野心家カフカ。

カフカの短編を「私」の文脈で読み直すとやがて此を書くに行つた方向性がくつきりして来る、つまり「名声」と云ふ名の其れ、歴史に印される「榮譽」と云ふ。此は池内紀氏の言であるが、僕はもう一人、やはり同じ帝政末期にオーストリアの辺境ボヘミアで、ユダヤ系ドイツ人として生まれた一人の作曲家／指揮者に想ひを馳せる。グスタフ・マラー其の人である。二人共、己の才気に頼り一代で非常に成功したインテリの父の許、改宗ユダヤ人として育てられ宗教的にはユダヤ、キリストどちらにも深い感化はされず…とは云へユダヤ人であると云ふ深刻なアンビヴァレンツを絶へず抱へ、故郷、安住の地、

そして自らのアイデンティティを問ふ近代的な懷疑主義者として生きた。

生涯を一官史として表向き静かに送り若くして逝つたカフカより、ヴェーン宮廷歌劇場の監督、そしてメトロポリタン歌劇場でも活躍した「指揮者マラー」は華やかで虚飾に満ち、権謀策謀渦巻く檜舞台で激動の日々だつたらう。一頃王城の片隅にある小部屋を仕事部屋に一夜ついで小説を書いたカフカ。

劇場のオフシーズン、夏のオーストリア・アルプス山麓湖畔の小屋でひたすら交響曲のスコアに埋没したマラー。孤独の質の似る人生。どちらも孤独の中から時空や次元ヲ超へ美しひ呼び声と成る純粹な結晶体。奇しくも同じやうに「やがて私の時代が来る」さう確信して逝つた預言者達は、複雑で危うい状況の中絶へず永遠への眼差しと志を挫ける事無く抱き続けペンを走らせ…作品だけが遺つた、まさしく預言の書。

僕は二人が、名や榮譽にどれ程、そして何処まで拘つてゐたのか？ 実のところ良く解らなひ。たゞし不思議な事に指揮者マラーの直弟子、ヴァルター、クレムペラーそして次世代の、（マラー解釈の大家に）バーンスタイン、ベルティーニと云つた、様々な幅広く個性的なユダヤ系の系譜が脈々と続き（中にはインバルを頭とする胡散臭ひ偽預言者も巧みに紛れ込み）彼らに依つてマラー・

ルネサンスの為されて行くのを「偶然」では片付けられなひと想ふ。血の召命とも云はうか、地域性や楽派を超へ、ディアスポラさへ生き延びた世界中からまう一つのシオニズムのやう、マラー美学に感化されたヘブライの裔達が彼の預言を次々と成就し地上に頹廢の樂園を築き行く。ハンメルンの笛吹き宜しく歌ひ逝つた不運の預言者の衣鉢を継ぎ踊り続く若者達。國民樂派のスメタナ、ドゥヴォジャーク、グリーク、シベリウス達のやうでは無い、数千年の彷徨を様々な形で耐へ忍んだ選民の裔ならではの特殊固有なスタイル。複雑で伏線の幾重にも張り巡らせられコムプレクスと虚榮にそして何よりアイロニーに溢れた其れらを抽象的なサンボリズムとして隠喩するのに大規模なシンフォニックスコアは格好なキヤムパス。マラーとカフカは、共にグロテスクと幻想の交錯する謎空間。プラハの街みたひな屈折率で似る。教養に溢れ確固たる古典形式を礎とし乍らラプソディックで破滅的な展開を嗜好、闇の漆黒を謳ひ乍ら虹の谿を航る。不可思議な美学に偏執狂的な拘りを崩さず。現在(いま)、着々と既に「古典」と成りつゝある、見事な迄に成就されゆく預言。高らかな哄笑が尚訝し続けてゐる…。

2019.05.01

「今回の一冊」『カフカ寓話集』池内紀編・訳岩波文庫  
「今回の三枚」

① G. マラー 第2交響曲ハ短調「復活」アムステルダム・トーンクンスト合唱団及びコンセルトヘボウ管弦楽団他  
O. クレムペラー 指揮 1951Live②同、同第5番嬰ハ短調  
M. フィルハーモニック(1947)③同、同第4番ト長調ヴィーナー・フィルハーモニー他 1951Live②③指揮 B. ヴァルター



# 憐れむ理由

士貞 啓二

(米国ミシガン州 隠棲)

りたいと思ったことはなく、しかし、死ぬまでそうだとしたら、自分の人生は何だったんだろう、と思うでしょうね、と出来の悪い笑いを繰り返すように答えるのを常としていたが：』、というのは、最近書いた小説の、気に入ってはいいたものの、訳あってボツにした書き出しなのだが、こういう厭世的気分は僕自身にも常々あったのかもしれない。

と、これは突飛のようだが、このところ度重なった身辺の「死」に触発された可能性もある。

若い頃から米国に住んでいた所為で、慶弔事は不義理をすることが多く、高校時代の友人の結婚式にも一度も出席できなかった。しかし、自分の母親の葬儀となるとちよつと遠いので、という訳にはいかない。本社勤務で日本にいた際、亡くなった従姉妹の時以来、葬儀に参列するのはこれが二回目というのも、この歳の男としては珍しいのではないか。死は遠かったのだ。

外国に永く住んで感性的にダメになったものに、他人と一緒にいる(湯の花、などという分泌物のような正体不明のものが浮遊している)大浴場、(断末魔の痙攣で会食者の喝采を浴びる)魚の活き造り、等々があるが、火葬後の骨上げなるものも母の葬いで初体験し、米人の妻共々深いショックを受けた。

それは、真新しいランドセルを背負った子供たちを見ても同様で、彼等の長い、永い人生に思いを遣ると、目が眩むよう。

『人生、やり直せるとしたら、いくつくらいに戻りたいですか、などと問われる度に、過去のどの切片にも戻

親友の母親が一月、同じ友人の兄が先月と立て続き、日常のようになってしまった。死が形而上的な思惟の対象であることを止め、身近な人々が次々に居なくなる、という即物的な現象に姿を変えた。特に日本の葬儀の、香典だの香典返しだのといった表層的儀式性が即物感を強める。友人の身内の葬儀は(メモリアルと称していたが)、これは恐らくアメリカでも珍しいのではないかと思われるが、数年前に亡くなった父親の際も宗教色が無く(牧師による祈祷や遺影すら無く)、近親者に引き続き、友人や知人が任意で演壇に上がり、生前の思い出をユーモアも交えて語る、という心のこもった印象だったので、これと比較するから日本の葬儀の表層性が強調されるのかもかもしれない。

ここでまた論旨が混迷するが、我等の起点、『森の生活』に立ち戻ってみよう。こういう一節がある…『多少の良識、やる気、能力がないために、やりたいことができなまいというのは、悲しいだけではなくばかばかしいと思っただのだ。(『ウォルデン湖に來た理由』)』

僕が社会人のフレッシュマンに対して感じる憐憫は、死の即物化による生の虚無ばかりではなく、『多少の良識、やる気、能力があるがばかりに、やりたくないことができちゃうというの、悲しいだけではなく馬鹿馬鹿

しい。』、というのが、激しい受験競争を勝ち抜き、良い会社に就職する、という本邦に於ける労働の実態なのではないか？安定さえ得られれば、トヨタでも日本生命でも小池ポテトチップスでも何でも良いのである。というところに母の介護のために早期退職して気付き、今は『良識や能力はないけど、やりたいことをやっている』自分は幸運である。母に感謝すべきなのだろうか。

# フォークダンスの思い出



ドラメリア (座敷わらし)

先日、高校生たちとすれ違ふと「体育祭」「練習が」という単語がちらりと聞こえた。そんな時期なのか。

わたしの母校では学校祭は九月だったが、体育祭の裏目玉はフォークダンスだった。「フォークダンス」というと、若い男女が手に手を取り合つて照れつつ踊る恋のメロディ的なものをイメージしようだが、母校のそれはそんな甘いものではない。四曲連続、しかも休憩なし。プログラム構成に異を唱えられない(唱えることも思いつかない)生徒たちは肅々と従っていたが、よく倒れる生徒がいなかったものだと思ふ。

曲目は年によつて変わるが、うち一曲は固定で、毎年「ハーモニカ」。陽気な曲調に合わせ輪になってひたすらステップを踏む、体力の要るダンスだ。なぜかこれだけは母校の伝統らしく、事前練習でも体育教師の熱の入りが段違いだった。「ホップ、ホップ! ほらもつと膝を上げて!」とかつたるような生徒たちに活を入れる体育教師の声を今でも思い出せる。

もつとも、ではその青息吐息ダンスを自分が体験したのかというところ、実はノーだったりもする。放送部だったわたしは、過酷なダンスに翻弄される生徒たちを見ながら、日陰のテントの中で音響を担当していた。司会役は他の部員に任せて常に音響担当だったので、演目に合わせて音源を換えるだけ。正直なところ楽なものだった。あれこれ面倒なこともあるけれど、今この場に座つていられるだけで、この部に入った甲斐があったなあ! という満足感と涼しさが、体育祭の思い出だったりする。



## ・編集後記:

先日、たまたま観光列車「あめつち」に初乗車。倉吉までの短い旅でしたが、団体客に混じつてゴージャスな気分を満喫しました。雰囲気の良い列車ですね。

ドラメリア(編集長)

「景色を自分のものにするために短歌があるのになつて気がします」  
:今回寄稿いただいた歌人の吉田恭太さんの言葉(結川真悟さん制作の番組から)。「音信不通」も、なにかを自分のためにするためにあるのだな、と学びました。

奈良敏行(発行人)